

— 連載 —

美術館のある風景 (第6回)

展覧会のなりたち〈その二〉

三菱一号館美術館 館長 高橋 明也



前回は、展覧会を作る際、最近はなかなか競争が激しい、ということを書きました。実際、一昔前、と言っても大学院を終了して私が美術館で仕事を始めたのが1980年のことですから、それ以前、1950～70年代の話です。その頃は、展覧会という催し自体まだまだ数が少ない時代でしたから、今に比べれば牧歌的な風が吹いていて、採算度外視のお祭りのような趣があったようです。各国の美術館も、自国の貴重な美術品を国外で見せる文化交流の良い機会と、はりきって優れた重要な作品を貸してくれたし、経費を負担する側（日本ではほとんどが新聞社などの大手メディアです）も、赤字を出してはいけないとか、絶対に何人以上の入場者を入れろ、などとケチなことは言わず、また共催する国・公立美術館側も大歓迎で展覧会を招聘していたと聞きます。

でも、そのバランスは急速に崩れます。1970年～80年代になると、各新聞社や放送局が競って展覧会を立ち上げるようになり、その結果、西洋美術に関して言えば超インフレ状態が訪れました。前にも書きましたが、それまで欧米の美術館の間では、自分たちの所蔵する作品を相互に貸し合い、長期間をかけて学術的な展覧会をするのが慣例でした。それが、日本という、強度の文化的飢餓感を大衆レベルで持つ経済大国の登場で、すっかりそのリズムが崩れてしまったわけです。

「〇〇美術館展」と銘打った、派手な仕掛けの展覧会がそれこそ溢れるようになっていきま

した。でも、日本の美術館にはもともとたいした予算が付いていませんから、結局はメディアの資金に頼ることとなり、必然的に展覧会は商業化の道を辿らざるを得なかったのです。

そしてその結果、ルノワールやモネ、ゴッホなどの印象派周辺の画家、さらにはシャガール、モディリアーニ、ピカソ他のエコール・ド・パリ以降の作家など、大衆的な人気のある画家の作品には繰り返しリクエストがかけられるようになりました。最初は困惑し、「商業的な企画には協力しない」と頑なに言っていた欧米の諸美術館も、次第に日本での企画に参加すれば金銭的な見返りがあると知るようになり、態度が変化していきました。実際、この頃より、とりわけ堅固な文化行政によって守られていたフランスの美術館を筆頭とする伝統ある美術館も、皆資金繰りに苦しむようになっていました。そのため、こうした機会を資金獲得のために積極的に利用する方向に走り出したのです。

2012年、三菱一号館美術館で我が国初の「シャルダン」展を開催しました。この18世紀フランスの油彩画は、制作された点数が少なく、各美術館でも大事にされているため、集めるのに大変苦労しました。総合監修のローザンバール前ルーヴル美術館館長にそのことを嘆くと、「作品をお金で集める習慣を付けてしまったのは日本人なんだよ」と言われ、答えに窮したことを思い出します。